



なるほどアイヌ文化トーク ソッコ de ソッコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学教授)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソッコ(=お便り)形式で語り合います。



イラスト/安田千夏

ネコが喉を鳴らすことをアイヌ語ではエトロって言います。人間のいびきも同じくエトロ。我が家ではネコがゴロゴロしていると、アイヌ語の「エトロ コロ アン(喉を鳴らしている)」をもじって「エトロコロニヤン」って言って笑ってます。

こんなふうに着しを与えてくれるネコは、いまや世界中で大ブーム。だけど、かつてのアイヌ社会ではあまりプラスのイメージじゃない気がします。物語でも、主人の奥さんを食い殺してなりすましていたり…日本のお話にもある化け猫系ですね。昔、二風谷に住んでいた頃、道路端にネコが死んでいたの埋めてあげたことがあるんだけど、それを菅野先生に伝えたら「情けをかけたらだめだぞ、ちゃんと上に石を置いたか?!」って強い口調で言われました。石を置くのはお墓というより、出てこさせないためらしいの。

もちろん人間を助けるネコの物語もありますよ。でもその場合も、ご主人に忠実なイヌとセツトで良いことをするケースが多いみたい。アイヌ社会では、狩猟のパートナーとしてかけがえのない存在だったイヌにくらべ、穀物を食べるネズミ対策として農耕社会で珍重されたネコは、外来の動物としてなじみがなかったのかしらっ。チャペという語も東北方言らしいね。

美幸さんはネコ派?イヌ派?



う〜ん、どちらかといえばイヌ派ですね。イヌは人懐こくて甘え上手で従順なイメージがあるのに対して、ネコはクールで気まぐれ、自由奔放ってイメージがあつて、どう扱って良いかわからないんだよな。

ネコの起源にまつわる話に、カムイ(神)が人間世界を見回っていると、悪魔が「いばらやあざみは人間の体を刺すばかりで役に立たない」といつて笑ったので、カムイが怒ってネズミを作り悪魔の口に投げ込むと、ネズミは悪魔の舌を噛み切った。舌を噛み切られた復讐に悪魔がネズミをどんどん増やし、ネズミは人間の家に入り込みいろんなものを噛み砕いて困ったので「ネズミを殺して」とカムイに頼んだことから、ネズミ退治のためにネコが作られた。という話。

「役目なしに天から降ろされたものはひとつも無い」というアイヌの世界観を表す言葉がありますが、「役に立たない」と笑った悪魔への罰がネズミを作り、ネコを作ったってこと。肉食のネコは、プ(食物庫)などの穀物に手を出す心配がないので、穀物を食い荒らすネズミを駆除する番人の役割を与えられたんだよな。

近頃は家にネズミがいること自体が珍しくなったせいか、ネズミを捕っているところ見かけないよね。ネコ本来の任務を忘れてしまっかもされないね…。

